

## 変化動詞文の格構造

井島 正博

はじめに

動詞構造に関しては、言語学の分野で、一九七〇年代にも場所理論、格文法、生成意味論などさまざまな理論が展開されたが、九〇年代以降も、認知意味論、概念意味論、語彙概念構造、構文文法などさらに精密化の度合いを増した議論が展開されている。

日本語文法の分野でも、動詞構造をもとにした体系的な議論こそないものの、特に変化動詞あるいは結果副詞に関しては、奥津（一九八一・一二、八三・一〇、九六・一〇）<sup>1</sup>、九七・二二、仁田（一九八三・一〇 a, b）をはじめとして、少なからぬ議論の蓄積がある。

筆者も井島（一九八六・三）で格文法理論を再構成し、その枠組をもとに井島（一九八八・三）で動詞の自他と使役文に関して、井島（一九八八・一二）で受身文に関して、さらに井島（一九九一・八）では可能文に関して、井島（一九九七・三）では授受動詞文に関して分析を試みてきた。本稿で

は、それを変化動詞文に関しても適用しようとするものである。ただし、本稿では、変化動詞文のさまざまな側面のうち、格構造に関わる問題だけを扱う。それ以外の側面に関しては、後考を俟ちたい。

### 1 変化動詞の格構造

変化動詞の意味構造に関しては、先に示した言語学の諸理論において、動詞の構造全体を論じる中で、すでにさまざまに分析されており、日本語学においても、変化動詞に限っては、あるが、奥津（一九八三・一〇）による分析が見られる。筆者は、これまで前稿で提示した拡大格文法の枠組を用いて、さまざまな構文を分析してきたが、変化動詞に関しても、他の諸理論と比べても遜色のない分析が可能であると考えている。そこでここでは、これまで通り、拡大格文法の枠組に基づいて議論していく。

1. 1 典型的變化動詞（ナル／スル）の格構造

さて、變化動詞のうちでも最も典型的なナルをもとに、變化動詞の格構造について考えてみたい。まず、項の数は(1) aのように二項である場合と(1) bのように三項である場合とがある。二項である場合は、ガ格項そのものが變化して二格項になるのに対して、三項である場合は、ガ格項は變化の前後でも自己同一性を保ち、その属性がカラ格項から二格項に變化する、という違いがある。

(1) a オタマジヤクシがカエルになった。

b 太郎が中学生から高校生になった。

すなわち、三項の場合には、ガ格項が動作主格、カラ格項が起点格、二格項が着点格を表わすことは見やすい。二項の場合は、そのうちガ格項に動作主格と起点格とが複合しており、二格項は着点格を表わすと考えられる。

そのうち、着点格の性格について考察を進めていきたい。

着点格項は、名詞に限らず、形容詞・形容動詞などで表わされる状態であることもある。すなわち、着点格「項」とはいつても、必ずしも名詞で実現されるような実体的なものではなくてもよい。

(2) a 柿の実が赤くなった。

b 花子がきれいになった。

そのことは、着点格項が属性叙述文の属性を表わすために

も用いられることから支持される。

(3) a あの柿の実が赤い。

b 太郎は高校生だ。

さらに、着点格項は、語彙によつては動詞の中に組み込まれていることもある。たとえば、(4) aの「丸く・なる」のような分析的な形態も、(4) bの「丸まる」のような非分析的な形態と置き換えることができる。

(4) a 猫が丸くなった。

b 猫が丸まった。

また、着点格項を受身文のガ格にすることはできない。すなわち、着点格項は対象格とは複合していない。

(5) a 太郎が高校生になった。

b \*高校生が太郎からなられた。

以上のことから、變化動詞文の格構造は次のようであると考えられる。すなわち、二項述語の場合、動作主格は同時に起点格となり、着点格は動作述語の中に組み込まれている。さらに、變化表現を使うということは、この二項は姿形は異なつても、同一物であると了解されているものと思われる。

(1) aの「オタマジヤクシ」と「カエル」とが、成長はしても同じ個体であると了解されているのももちろん、(6) a・bの「ボール」と「ウサギ」、「カボチャ」と「馬車」も、少なくとも變化表現を用いた認識の背後には、両者が同一対象であるという了解があるものと思われる。

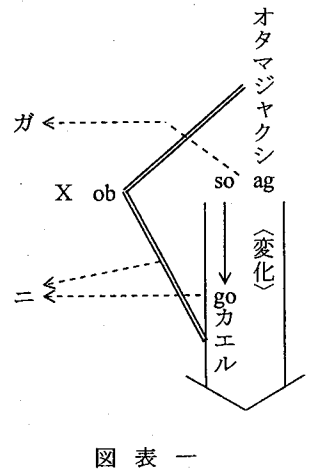
(6) a 手品で、シルクハットの下のボールがウサギになった。

b 魔法で、カボチャが馬車になった。

これを保証するものとして、変化動作外の対象Xを想定したい。すなわち、Xを対象格、二項をそれぞれ状態述語とする格構造を加えておきたい(1) a で言えば、およそ「Xはオタマジヤクシである」と「Xはカエルである」との二つの状態述語。ここではXにペット名などを代入すればわかりやすい。

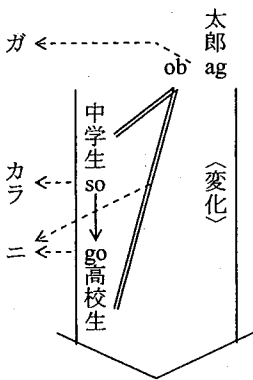
格助詞の取り方については、動作主格がガ格で実現されることは問題ないとして、第二項がニ格で実現されることも、着点格であることを支持している。ただし、第一に、この第二項には名詞十二で実現される他、形容詞・形容動詞の連用形が用いられることがある、第二に、歴史的に見れば、第二項は和文脈ではニ格、漢文脈ではト格で実現されるが、断定の助動詞は和文脈ではナリ(連用形はニ)、漢文脈ではタリ(連用形はト)であることなどに鑑みて、このニを断定の助動詞の連用形と見る考え方にも従うべきところがあるように思われる。すなわち、第二項のニ格には、着点格と状態述語(断定の助動詞)という二つの側面があることにある。また、そのような点からも、第二項は動作外の事物Xの状態述語であると考えることには根拠があるように思われる。

これらを総合すると、二項をとる変化自動詞ナルの格構造は次のように図示できる(図表一)。



図表一

次に三項述語の場合について検討してみたい。動作主格がガ格、起点格がカラ格、着点格がニ格となることは問題ないだろう。さらに先ほど、二項述語に関して議論したが、変化動作外の事物Xというものが必要性的について議論したが、三項述語に関しては、変化動作の動作主格項がまさにXに相当することになる。すなわちそれを対象格として、起点格項・着点格項はそれぞれ状態述語でもあることになる。また、起点格・着点格は変化動作の中に繰り込まれている(図表二)。



図表二

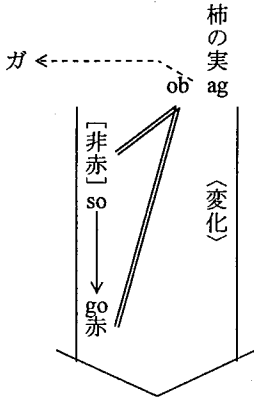
また、先に見た、着点格が形容詞・形容動詞などの状態述語となっている(2) a・b、(4) a・bなどは、一見二項述語のように見えるが、起点格項が明示されていない三項述語であると考えられる。起点の状態は重要でないために、表現されていないと解釈される。一般的に、三項の変化自動詞ナルにおいては、起点格項よりも着点格項の方が重要な情報となる。たとえば、(1) bでは、(7) a・bのように、起点格項は省略可能であるが、着点格項は省略不可能である。

(7) a 太郎がφ高校生になった。

b \*太郎が中学生からφなった。

ましてや、形容詞・形容動詞が着点格項である(2) a・b、(4) aは、形容詞・形容動詞を省略することは考えられない。

(4) bのように、着点格項を組み込んだ動詞があるように、着点格項は必須要素として述語の中に組み込まれているものと思われる(図表三)。



図表三

さらに、先ほど、着点格項は形容詞・形容動詞などの状態述語でもよいことを論じたが、動作主格も実体を持つ名詞である必要はない。(8) aはこれまでの議論通り、実体を持つ名詞が動作主格で、役割名詞が着点格となっているが、それを逆転した(8) bのような形も可能である。

(8) a 小泉が(厚生大臣から)総理大臣になった。

b 総理大臣が(森から)小泉になった。

その背後には、(8) aに対して(9) a、(8) bに対して(9) bのような題述文が可能であることが、これらの表現を支えているものと思われる。

(9) a 小泉は総理大臣だ。

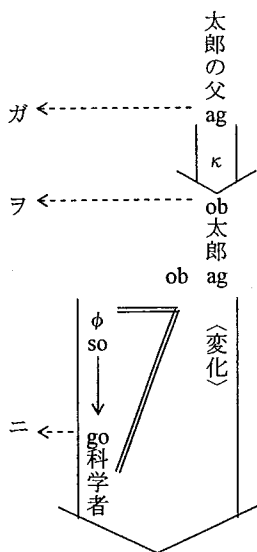
b 総理大臣は小泉だ。

要するに、ここに示した格構造は、変化表現の形式的な記述なのであって、それを埋める項にどのような要素が代入されるかは、題述文の可能性など、他の要因によって決定されるものであると思われる。

さらに、変化自動詞ナルの他動形はスルであると考えられるが、スルの格構造は、(10) aの受身表現が(10) bであることから、「太郎」は「太郎の父」を動作主格とする使役動作の対象格であると考えられる。さらに、「太郎」は「科学者になる」という変化動作の動作主格である。以上のことから、変化他動詞スルは、井島(一九八八・三)で議論したように、ナルの上位にさらに使役動作が重なった形であると分析でき

る (図表四)。

- (10) a 太郎の父は太郎を科学者にした。  
 b 太郎は父に科学者にさせられた。



図表四

(10) は三項述語の使役形であつたが、(11) a・b のように、二項述語も使役形にすることができる。

- (11) a 太郎は部屋を暖めて、冬にサナギを蝶にした。  
 b 太郎は熱を加えて、水を水蒸気にした。

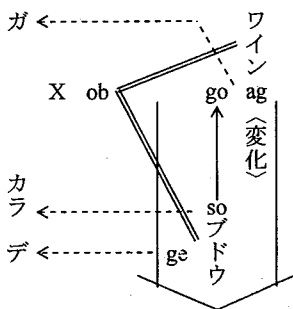
1・2 生成動詞 (デキル/ツクル) の格構造

さて次に、典型的な生成自動詞デキルの構造について考えておきたい。

- (12) a ブドウから／で極上のワインができた。  
 b 小麦粉から／で香ばしいパンができた。

デキルのガ格項は、カラ格をとる起点格項に対して着点格と

なっていると考えられる。ただし、起点格項は原材料とも考えられるので、その他さまざまな意味関係を担う一般格 (原料、手段、道具などを表わす) のデ格で表現されることもある。また、この二つの項は同一物であると認識されているが、それは X によって保証される (図表五)。



図表五

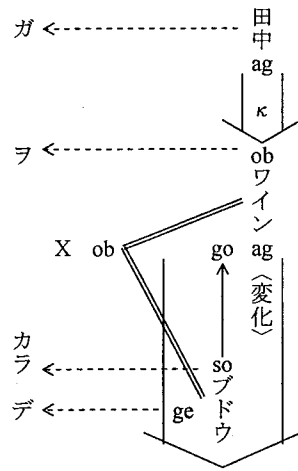
以上のように、デキルは二項述語のナルと対称的な格構造をとっていると考えられる。

ここで、デキルを他動化したものが、ツクルであると思われる。

- (13) a 田中はブドウから／で極上のワインを作った。  
 b 花子は小麦粉から／で香ばしいパンを作った。  
 実際、受身化するとヲ格がガ格に上昇する。
- (14) a (田中によって) 極上のワインがブドウから／で作られた。

b (花子によって) 香ばしいパンが小麦粉から／で作られた。

従って、格構造は以下のように記述できる(図表六)。



図表六

1・3 破壊動詞の格構造

理論的には、生成動詞と対になるものとして、破壊動詞が要請される。典型的なものとして、「壊れる／壊す」「崩れる／崩す」「倒れる／倒す」などが考えられるが、生成動詞デキル／ツクルがかなり汎用的であったのに対して、破壊動詞は対象格項として(構築物)というような意味を要求するなど、どれもかなり用法が限定されており、汎用的なものには特に見当たらない。

- (15) a 田中はブドウから／で極上のワインを作った。(13) a  
 \* 田中は極上のワインを壊した／崩した／倒した。

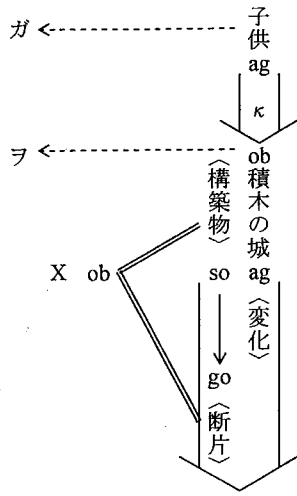
b 花子は小麦粉から／で香ばしいパンを作った。(13) b  
 \* 花子は香ばしいパンを壊した／崩した／倒した。

たとえば、「壊れる／壊す」の場合、典型的には、変化動作の動作主格項の意味として(構築物)というような特徴が要求されており、それを起点格として、(断片(・破片など))を着点格とする変化が破壊動詞の意味である。ここで、(構築物)という意味を持つ起点格項は必須項であるが、(断片)という意味を持つ着点格項は実現されることは少ない。これは、破壊動詞が起点格項に重点を置くという特性を持ったためであると思われる。また、(構築物)も(断片)も同一物であるという了解があつてはじめて(破壊)という認識が成立すると思われるので、この場合にも両者の同一性を保証するXを想定しておきたい。

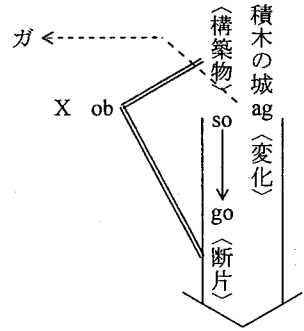
- (16) a 積木の城が壊れた。  
 b 子供が積木の城を壊した。

ただし、着点格項も、「ばらばらに・こなごなに」のような副詞句として実現しうる(あるいは「ばらばらの」断片に・(こなごなの)破片に)のような名詞句として実現することも不可能ではないかもしれない。副詞句についてはまた後に議論する(図表七・八)。

- (17) a 積木の城が(ばらばら(？のブロック)に)壊れた。  
 b 子供が積木の城を(ばらばら(？のブロック)に)壊した。



図表八



図表七

ただし、積木の城が壊れてはばらばらになって、もはや眼前には積木の城がない状態であっても、(18) b ではなく(18) a のような状態述語文で表現することがある。

(18) a 積木の城がばらばらだ。

b 積木が散らばっている。

このような場合、眼前の積木の山を、壊れる前の城と同定しているのだと考えれば、(16) a のような破壊動詞文は、「積木の城」の状態変化を表わすということになる。しかし、(18) a はむしろ、破壊前の「積木の城」に対して、破壊後の「ばらばらだ」という状態を述語付けした臨時的な状態述語文であって、破壊動詞文の一種の省略形であると了解しておきたい。

ただし、完全な破壊までは至らず、「破損」という程度であつたり、「非稼働」であつたりすれば、破壊前の事物と破壊後の事物とは、問題なく同定できる。

(19) a (マストが折れて) おもちゃの帆船が壊れた。

b テレビのリモコンが壊れた。

この場合は、〈完全〉な状態から〈破損〉した状態へ、ないし〈稼働〉している状態から〈非稼働〉の状態への変化を表わす、三項をとる一般的な変化動詞文であると考えられる。このような点でも、破壊動詞と生成動詞とは、非対称的である。

1・4 出現動詞の格構造

出現自動詞は、典型的なものとして「現われる・出る・生まれる」などが挙げられる。

(20) a 文学界にまた新人が現われた。

b チヨムスキーの新刊が出た。

出現動詞がこれまでの変化動詞と異なる点は、典型的には、変化が事物の存在に関わるということ、すなわち〈非在〉から〈存在〉への変化を表わすということである。さて、この出現動詞の格構造はどうなっているだろうか。出現および次に見る消滅は、存在（非在）文と深い関わりがあると思われる。たとえば、(21) b のような非在文で表される状態から、(21) a のような存在文で表わされる状態への変化が(21) c のような出現動詞文で表わされる出現変化であり、その逆が(21) d のような消滅動詞文で表わされる消滅である。

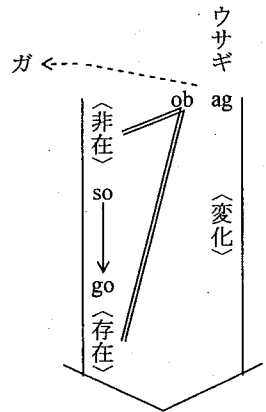
(21) a シルクハットの中にウサギがいた。

b シルクハットの中にウサギがいなかった。

c シルクハットの中から／＊にウサギが消えた。

d シルクハットの中から／＊にウサギが消えた。

すなわち、出現・消滅の動作主格項は、同時に〈存在〉・〈非在〉をそれぞれ状態述語とする対象格でもある（ここではとりあえず、存在文も特殊な状態述語文と扱っておく）。さらに、出現は〈非在〉を起点格、〈存在〉を着点格とし、消滅は〈存在〉を起点格、〈非在〉を着点格とする三項動詞である。以上を図示すると、出現動詞は次のように記述できる（図表九）。



図表九

ここで、(21) c では、出現場所に位置格の二の他、起点格のカラが用いられており、(21) d では、消滅場所に起点格のカラが用いられている。これは移動動詞の中の“到来”・“退去”の表現と類縁性がある。

(22) a 太郎は窓から外に出た。(經由点)

b その男は北海道からやって来た。(起点)

c その男は東京から去った。

すなわち、出現とは、非現実世界を起点として（あるいはある地点を“經由”して）現実世界への“到来”であり、消滅とは、現実世界からの“退去”である、という意味である。

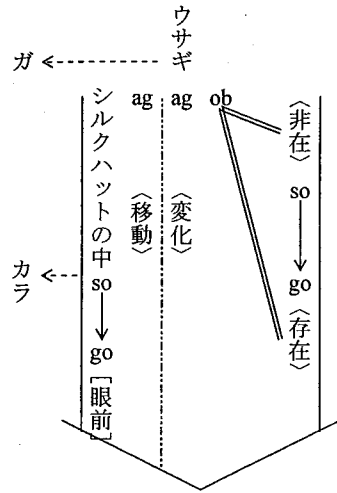
(23) a 救世主が神のもとからこの世にやって来た。

b 救世主がこの世から去っていった。

そのような観点からすれば、(21) c・d の起点格・經由点格は、変化動詞の意味に組み込まれたものではないと考えられ



る (図表十)。



図表十

出現動詞には、他の変化動詞に比べて、他動詞は見出しにくい。確かに、日常生活では出現を促すという行為はしばしば見出されるといってもいいだろう。したがって、出現動詞「現わす・出す」が用いられる場合は、再帰表現となることも多い。

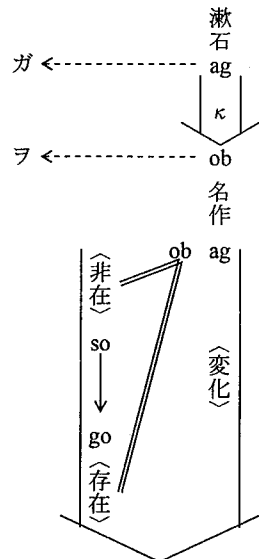
(24) a 山田が姿を現わした。

b 佐藤が忘年会に顔を出した。

とはいうものの、「生む(生みだす)」は自然に出現他動詞として用いられるし、「出す(輩出する)」などでも物主構文として用いることができる(図表十一)。

(25) a 漱石は数々の名作を生み出した。

b 金沢は多くの作家を輩出した。



図表十一

また、出現動詞は、「非在」から「存在」への変化を表わす他に、「不可視」から「可視」への変化、「不在」から「前在」(眼前存在)への変化のように、対象そのものの存在に関わるものではない場合にも用いられる。

(26) a 暗闇から真犯人が現われた。

b あわやというところに明智小五郎が登場した。

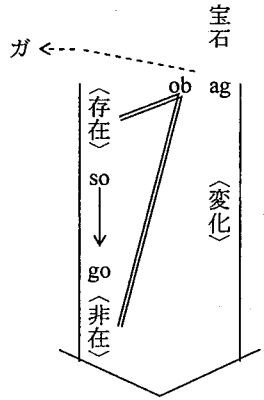
### 1・5 消滅動詞の格構造

消滅自動詞は、典型的なものとして「消える・失せる・なくなる・隠す」などが挙げられる。

(27) a 金庫の中から宝石がなくなつた。

b 一夜にして砂漠の町が砂の下に消えた。

消滅動詞は、出現動詞と対称的に、「存在」から「非在」への変化を表わす(図表十二)。



図表十二

消滅動詞は「存在」から「非在」への変化を表わすとはい  
うものの、多くの例は「可視」から「不可視」へ、「現在」  
から「不在」への変化を表わす。(27) a・bの例も、むしろそ  
のような例であると考えた方がよいように思われる。

また、他動詞が用いられる場合は、やはり日常生活で消滅  
を促すということがあまりしばしば生じることではないから  
であろうか、(28) aのように、「消滅」というよりは「獲得」  
に對立する「紛失」と呼んだ方がよい場合や(この場合、も  
はや変化動詞とも言いがたい)、(28) bのように、再帰表現と  
なる場合などが散見される。

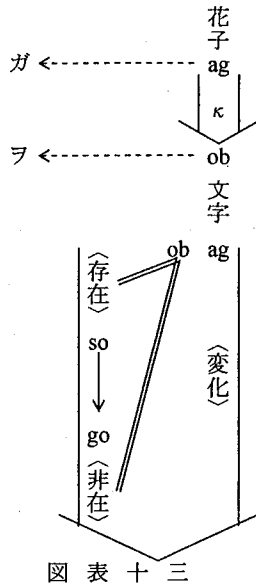
(28) a 山田は電車の中で財布をなくした。

b 花子はヨーロッパ旅行中に姿を消した。

もちろん、「黒板の文字」や「理性」など、実体を持たな  
い抽象物などは消滅他動詞を自然に用いることができる(図  
表十三)。

(29) a 花子は黒板の文字を消した。

b あまりの悲しみに、鈴木は理性をなくした。



図表十三

さてここで、出現動詞と消滅動詞とを見比べてみると、起  
点格と着点格との位置が逆転しているもの、変化動作の動  
作主はいずれも「存在」という意味を持つ方である点は共通  
している。やはり、出現する(出現した後存在する)事物  
であれ、消滅する(消滅する前に存在した)事物であれ、存  
在する事物しか動作主としてとりえないということなのだろ  
う。

ある意味では、事物の存在を問題にするということは、最  
も根本的なことである。事物のさまざまな状態の変化を描写  
するということは、その前提として、その事物がそもそも存  
在していなければならない。出現・消滅以外の変化動作は、  
動作主格項が「存在」という意味特徴を持つてることが前

提されているということもできる。ここで、論理学で問題にされる、存在前提の議論が想起される。

1・6 増加動詞の格構造

これまではあまり注目されることはなかったが、数量変化は、他の変化と区別して考えたい。数量変化は、一方では事物の属性変化の一種とも解釈できるが、他方では存在変化とも解釈できるという二重性がある。

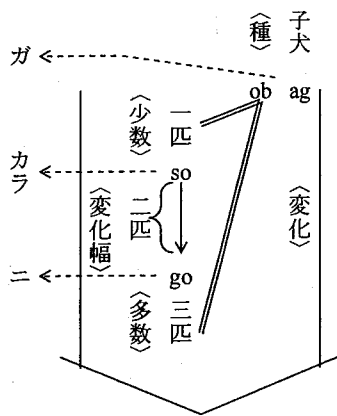
たとえば、(30) a の起点格項「一匹」、着点格項「三匹」は、「子犬」のいわゆる「属性」とは言いがたい。今まで「一匹」いた特定の「子犬」の他に、新たに「二匹」の子犬が生まれ、合計「三匹」になったわけだから、「子犬」の存在のしかた（ここでは数量）に変化が生じたということである。このことは、増加変化動作の動作主格は特定の個物を表わすのではなく、「種」を表わすということも意味している。また、数量詞が数量変化の幅を表わす(30) b のような表現もある。

- (30) a (愛犬がまた子犬を生んで) 子犬が (一匹から) 三匹に増えた。

b 子犬が二匹増えた。

要するに、増加変化の場合は、動作主格項は「種」という特徴を持ち、起点格項・着点格項および変化幅はいずれも、「数量」という特徴を持たなければならないが（変化幅には

「割合」がきてもよい）、そのうち、増加変化は起点格項に（相対的に）「少数（ないし「少量」）、着点格項に「多数（ないし「大量）」という特徴を持つものがくる（図表十四）。



図表十四

出現動詞に、「不可視」から「可視」への変化、「不在」から「現在」への変化があったように、増加動詞にも、純粋な「出現」による増加の他に、「添加」「到来」による増加の場合がある。

- (31) a 店が繁盛して、従業員が五人に増えた。

b エサを撒いたら、庭の雀が八羽に増えた。

また、起点の数量が「皆無」である場合も考えられるが、このような点も、増加動詞と出現動詞との近さを示唆している。

- (32) a 夫婦でやっていた店がはやって従業員を三人増やした

b 結婚五年目で、子供が三人に増えた。

さらに、増加他動詞も問題なく用いられる。ただし、格構造図は省略する。

(33) a 忘年会の参加者がふえたので、お酒の注文を十本に増やした。

b 仕事が軌道に乗って、規模を三倍に増やした。

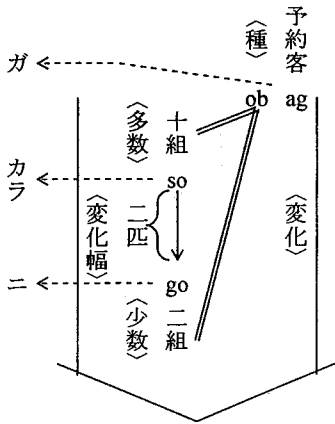
1・7 減少動詞の格構造

減少動詞は、増加動詞とほとんど対称的な振舞いを示す。

増加動詞の起点格項と着点格項の特徴を逆にすれば、そのまま減少動詞の格構造となる(図表十五)。

(34) a 大地震で、旅館の予約客が(十組から)二組に減った。

b 地震から一週間経って、余震が随分減った。



図表十五

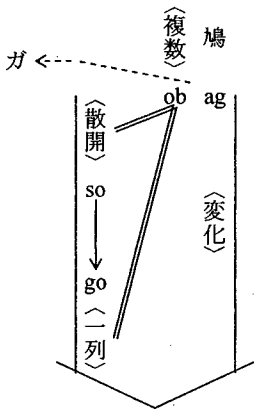
1・8 関係動詞の格構造

ここで関係動詞と呼ぶのは、事物が複数ある場合、事物の属性・数量などには変化はなく、空間的・時間的その他(順位・成績など)の相対的位置・配列の変化を表わす動詞のことである。

この場合、動作主格項は「複数」という特徴を持ち、起点格項・着点格項は、相対的位置・配列を表わす副詞句(「一列に」「まっすぐ」「じごくくに」「丸く」「ばらばらに」「一塊りに」など)か、視覚的印象を表わす副詞句(「きれいに」「見栄えよく」「はなやかに」など)をとる(図表十六)。

(35) a 電線に鳩が一列に並んでいる。

b 刺身を見栄えよく盛りつけた。



図表十六

副詞句の取り方は、関係動詞によってかなり厳しく制約さ

れている。

(36) a 生徒たちが一列に／まっすぐ／\*ばらばらに／\*じごく  
ざくに整列した。

b クリスマスツリーをきれいに／はなやかに／\*みすば  
らしく／\*寒々と飾った。

その制約は、関係動詞の個別的な意味と結び付いているが、  
ここではそこまで追究することはしない。

1・9 付・移動動詞の格構造

これまで論じてきたように、変化動詞の格構造をとらえる  
と、移動動詞も空間的位置変化と考えられるという点で、変  
化動詞の一種形であると了解することもできる。実際、語彙  
概念構造理論では、そのような扱いがなされている(影山(一  
九九三・一〇、九六・一〇)など)。

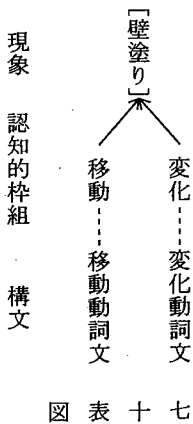
理論構成上、移動動詞を変化動詞の下位範疇と考えること  
も、変化動詞と同列の範疇と考えることも可能だろう。ただ、  
(二)で「壁塗り代換 spray paint hypallage」のことを想起し  
てみたい(奥津(一九八一・一二)などに詳しい議論がある)。  
結論的に述べれば、(37) a のようなヲ・テ型は、「壁」という  
事物が、「ペンキ」という手段によって、「白く」状態変化す  
る、という「変化動詞」としての了解、(37) b のようなニ・ヲ  
型は、「ペンキ」という事物を、「壁」という着点に移動させ

る、という「移動動詞」としての了解であると考えられる。

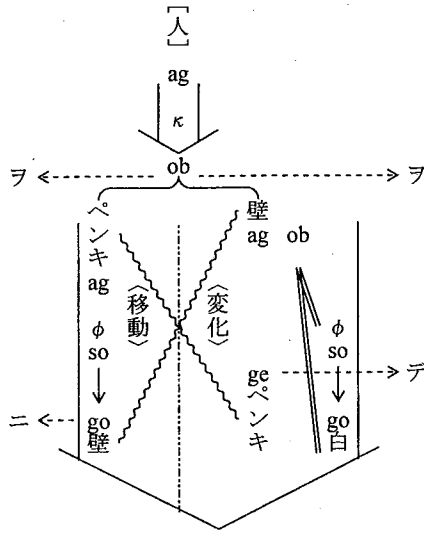
結果副詞の共起も、(27) a には自然であるが、(27) b には不自然  
であるという点で、それを支持している。

(37) a 壁をペンキで(白く)塗った。  
b 壁にペンキを(\*白く)塗った。

このような現象は、日本語に限らず、英語など異系統の言  
語にも見られる(むしろ、最初に英語で指摘された)言語普  
遍的な現象であると考えられる。このことが意味しているこ  
とは、人間が外界の現象を認知するには、限られた数の認知  
の枠組というものが前もって用意されており、それを現象に  
当てはめて現象を類型化することによってどのような種類の  
現象であるかを理解するものと考えられる。もちろん、現象  
によって当てはめやすい枠組というものがあると思われ、典  
型的な場合には一つに限られるだろうが、「壁塗り」のよう  
な場合は、(変化)の枠組も、(移動)の枠組もどちらも当て  
はめ可能な中間的な現象であるのであろう(図表十七)。



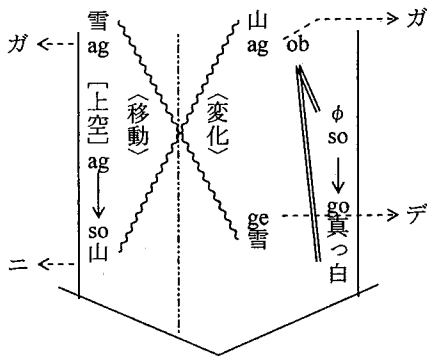
以上のことを構造図で示すと次のように図示できる(図表十八)。



図表十八

このように考えると、(変化)と(移動)とは、認知的に区別されているのではないかと思われる。したがって、変化動詞について議論する本稿では、移動動詞を変化動詞とは独立した構文であると考えて、議論から除外することにしたい。

ちなみに、堀川(一九九三)は、一般的に変化の対象は他動詞のヲ格か非対格自動詞のガ格であるのに、(38) a ~ d のように、ニ格で実現されている一見例外的な用例を示す。



図表十九

- (38)
- a 山に雪が真っ白に積もった。
  - b まな板に魚のにおいが生臭くしみついた。
  - c 爪にマニキュアを真っ赤に塗った。
  - d 部屋に花を豪華に飾った。
- しかしながら、これも壁塗り代換によって容易に説明することができるといふ。すなわち、確かに(変化)という観点からは、(38) a 「山」、b 「まな板」、c 「爪」、d 「部屋」は変化の対象であるが、他方ではこれらは(移動)という観点から解釈することもでき、その観点では、それらは移動の対象(38) a 「雪」、b 「魚のにおい」、c 「マニキュア」、d 「花」の移動の着点となっている(図表十九)。

実際、(38) a ~ d は、ガ・デ型という変化動詞文の格構造で言い換えることができる。ただし、(38) a・b は動詞を代表的変化動詞ナルに置き換えなければならない。

(39) a 山が雪で真っ白に??積もった/なった。

b まな板が魚のにおいで生臭く\*しみついた/なった。

c 爪をマニキュアで真っ赤に塗った。

d 部屋を花で豪華に飾った。

これは、「積もる」「しみつく」という動詞が、現実には(変化)という解釈も不可能ではないものの、動詞としては変化動詞としての格支配しか許さないことを意味しているのだろう。

### 1・10 奥津(一九八三・一〇)との対応

奥津(一九八三・一〇)は(事物)(始発)(結果)という操作概念をもとに変化動詞を分類しており、本稿とは立場を異にするが、とりあえず奥津(一九八三・一〇)と本稿との動詞分類を比較すると、奥津(一九八三・一〇)の②消滅動詞に本稿の消滅動詞、③発生動詞に出現動詞、④生産動詞に生成動詞がおよそ対応する以外は、すべて①一般変化動詞に含まれることになるだろう。

奥津(一九八三・一〇) 本稿

①一般変化動詞… 典型的变化動詞・破壊動詞・増加動詞・減少動詞・関係動詞

②消滅動詞… 消滅動詞

③発生動詞… 出現動詞

④生産動詞… 生成動詞

### 2 複合動詞

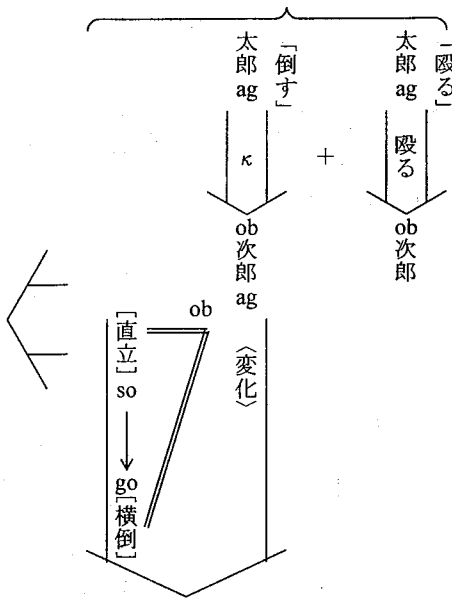
典型的な複合動詞の構造は(動作動詞|変化動詞)である  
と論じられることがある。たとえば、(40) a・b の「殴る」「押しす」は動作主の対象に対する働きかけを表わす動作動詞であり、「倒す」は動作主が対象の変化を引き起こす変化動詞である。

(40) a 太郎が次郎を殴り倒した。

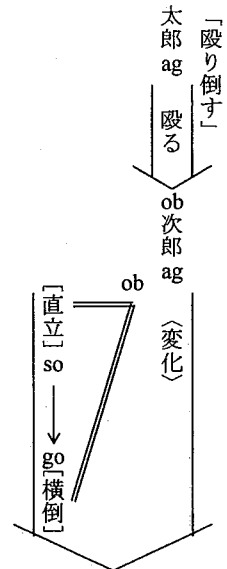
b 太郎が次郎を押し倒した。

ここで、動作動詞「殴る」「押す」は、対象に対する働きかけに注目する動詞であり、その結果対象にどのような変化が生ずるかには無関心であるのに対し、変化動詞「倒す」は、対象に引き起こされた変化に注目する動詞であり、そのような変化を引き起こした手段としての働きかけ方には無関心な動詞であると考えられる。ここで、複合動詞「殴り倒す」「押し倒す」が用いられる場合は、動作主の対象に対する働きか

けとその結果としての対象の変化を全体として表現したいために、複合動詞の前動詞によって動作主の対象に対する働きかけを、後動詞によって動作主によって引き起こされた対象の変化をそれぞれ表わし分けるのであると解釈することができる(ここで、「倒す」の意味を、「直立した状態から横倒しの状態への変化を引き起こす」ことであると考えると以下のように図示する)(図表二十一)。



図表 二 十



このような構造は、影山(一九九六・一〇)に示された動詞構造に当てはめて、「殴る」「押す」が「上位事象」を表わし、「倒す」が「下位事象」を表わすと考えれば、語彙概念構造論によって議論された動詞構造とある程度並行すると言ふことはできる。

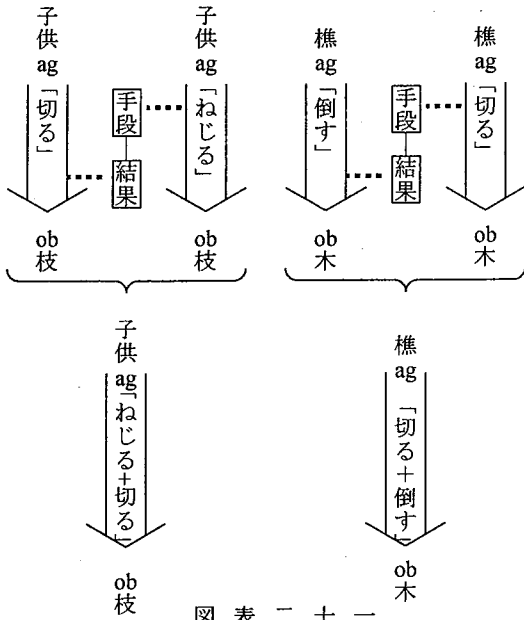
しかしながら、すべての複合動詞が〈動作動詞—変化動詞〉という構造を持っているわけではない。〈変化動詞—変化動詞〉という構造を持つものも決して少なくない(ただし、〈動作動詞—動作動詞〉あるいは〈変化動詞—動作動詞〉は見出しがたい)。

- (41) a 樵が木を切り倒した。  
b 子供が枝をねじり切った。

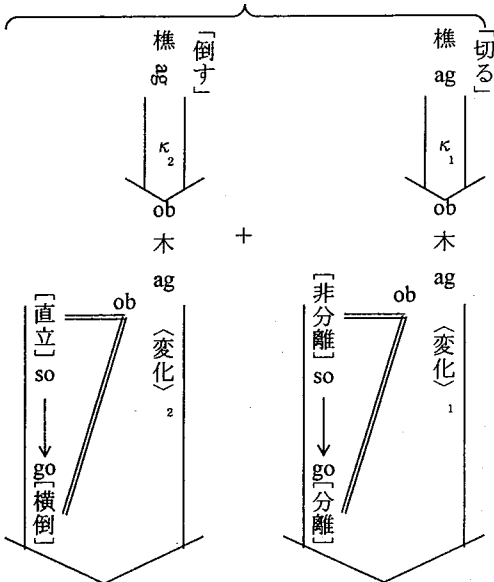
ここで、変化動詞「切る」は、「切り倒す」の前項にもなり、「ねじり切る」の後項にもなっている。このように、若干でも前項および後項になりうる動詞があるということとは、単に動詞の〈動作〉／〈変化〉といった意味のみによって複



合動詞の前項・後項となるかが決定されるわけではないことを示唆している。そこで浮上してくるのが、〈手段〉／〈結果〉という関係である。この〈手段〉／〈結果〉は、先の〈動作〉／〈変化〉とは異なって、あらかじめ動詞ごとに決定されている意味素性であるとは言えない。そうではなく、(原則として)二つの動詞の間で、一方が他方の手段であり、他方が一方の結果であるというように、相対的に決定されるものである。(図では、変化動詞内の構造は省略してある、図表二十一)



図表二十一



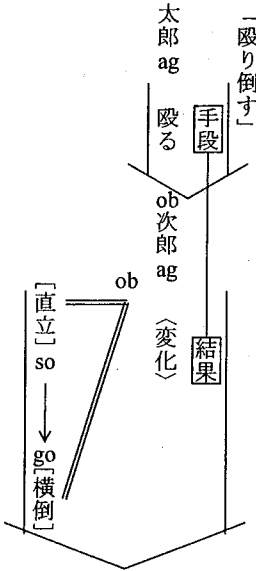
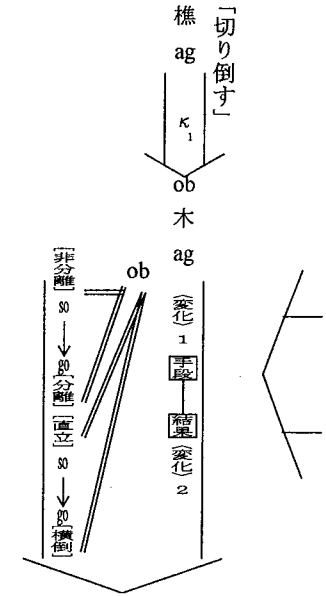
図表二十二

(42) a 樵が斧で木を切り倒した。  
b ??樵が体で押して木を切り倒した。

ここで、あえてこの格構造を記述するとどうなるだろうか。ここで直接動作  $\kappa$  の手段・道具あるいは様態を表わす副詞句を挿入してみる。「斧で」は「切る」の手段・道具、「体で押して」は「倒す」の様態であるが、(42) a は自然であるが、(42) b は不自然であることから、複合動詞の直接動作は「切る」の方のものであり、「倒す」のはその結果にしか過ぎない、と考えられる(図表二十二)。

### 3 結果副詞

#### 3・1 結果副詞と変化動詞



図表二十三

以上のように、複合動詞の構造を〈手段〉—〈結果〉構造でとらえるべきであるとするならば、翻って「殴り倒す」のように〈動作〉—〈変化〉で分析されていた典型的な複合動詞も、以下のように、〈手段〉—〈結果〉構造で分析すべきなのではないだろうか(図表二十三)。

- 影山(二〇〇一・三)によれば、英語では結果構文は動詞が〈変化〉という意味特徴を持つ場合(43) a・b)にも、持たない場合(44) a・b)にも用いることができる。ただし、(43) b)に見るように、〈変化〉の結果が動詞に組み込まれたものとは異なる場合には非文となる。
- (43) a She was burned brown by the sun.  
(彼女は小麦色に日焼けした。)
- b The stained glass broke to pieces (\*worthless).  
(ステンドグラスが粉々に/\*二束三文に割れた。)
- (44) a He pounded the metal flat.  
(\*彼は金属を平らに叩いた。)
- b She ran her sneakers ragged.  
(\*彼女は運動靴をぼろぼろに走った。)
- しかるに、(43) a・b、(44) a・bの日本語直訳の許容度にも見るように、日本語では、結果副詞をとるためには必ず、動詞に〈変化〉という意味特徴が含まれていなければならない。同様に、次の(45) a・b・cは、動詞が単に〈働きかけ〉の意味しかない他動詞であるために結果副詞をとることができないが、(45) a・b・cのように、〈変化〉の意味を持つ

動詞と複合動詞を作ることによって結果副詞をとることができ  
 なるようになる。

(45) a \* 太郎は花びんを粉みじんに叩いた。

a 太郎は花びんを粉みじんに叩き割った。

b \* 花子はその布を真つ二つに引いた。

b 花子はその布を真つ二つに引き裂いた。

c \* そのマラソン選手は靴をぼろぼろに履き潰した。

c そのマラソン選手は靴をぼろぼろに履き潰した。

以上は他動詞であったが、能格自動詞であっても、(変化)の  
 意味を持つ動詞と複合動詞を作れば、結果副詞をとることが  
 できる。

(46) a \* 太郎はへとへとに走った。

a 太郎はへとへとに走り疲れた。

b \* 花子は真つ赤に泣いた。

b 花子は(目の縁を)真つ赤に泣きはらした。

c \* その候補者はがらがらに叫んだ。

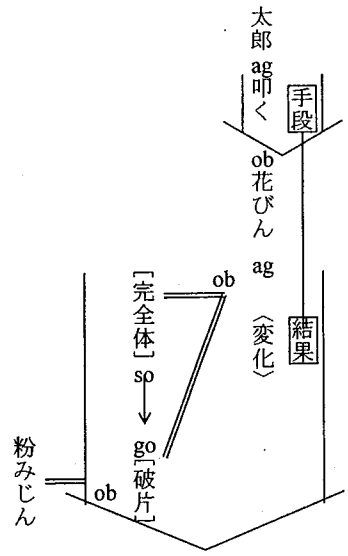
c その候補者は(声を)がらがらに叫びからした。

以上のことから、結果副詞を変化動詞の(変化)の着点を  
 対象格とする述語付け表現と考えることができる(デイヴィ  
 ャッドソン(一九八〇)が、形式論理的に、結果副詞を含む  
 情態副詞を動詞を変項とする述語と記述したことを平行的)。

これに、複合動詞の分析で得た手段—結果構造を組み合わ  
 せると、これらの構造は以下のように記述することができる

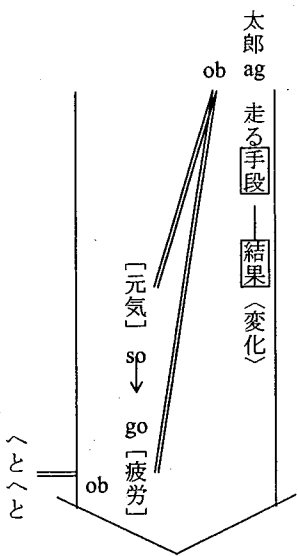
(図表二十四、二十五)。

・他動詞+変化動詞



図表二十四

・能格自動詞+変化動詞



図表二十五

次に、結果副詞と結果形容詞との並行現象について考察したい。ここで、結果副詞とは、従来の情態副詞のうち、動詞の表わす〔変化〕の結果的なりさまを表わすもの、他、形容詞・形容動詞の連用形で同様の性質を持つものを含めることにする。それと並行して、結果形容詞とは、連体詞および形容詞・形容動詞の連体形による名詞修飾用法で、同様の性質を持つものを指すことにする。要するに、形容詞・形容動詞に関しては、連用形・連体形のものとおよそ並行する。

さて、結果副詞と結果形容詞との交替について最初にまとめた考察を試みた奥津（一九八三・一〇）では、まず変化動詞文の基本的な意味構造を次のように了解する。

——〔始発〕——ニアリ、ソノ後ノ或ル時点（ $t_2$ ）ニ  
 オイテ別ノ状態（ $s_2$ ）——〔結果〕——ニアルヨウナ  
 デキゴトヲ〔変化〕トシ、コノ〔変化〕ヲ表ス文ヲ変化  
 動詞文ト呼ブ

すなわち、一般的には変化動詞文には〔始発〕〔結果〕の三者が必要であることになる。しかしながら、変化動詞の中にはこのうちの二つしかとれないものもあり、その観点から変化動詞は次の四類に分類できるといふ。

① 一般変化動詞：〔事物〕〔始発〕〔結果〕

② 消滅動詞：〔始発〕

③ 発生動詞：〔結果〕

④ 生産動詞：〔始発〕〔結果〕

すなわち、三者を備えた一般変化動詞に対して、消滅動詞は〔始発〕の対象が無に帰すことを表わし、発生動詞は無から〔結果〕の対象が生ずることを表わし、さらに生産動詞は〔始発〕の材料を〔結果〕の生産物に加工することを表わす、ということになる。

(47) a 信号が赤から青になった。（一般変化動詞）

b おごる平家もついに亡びた。（消滅動詞）

c ひげが生える。（発生動詞）

d 明石の鯛をさしみにつくる。（生産動詞）

d 明石の鯛でさしみをつくる。（同右）

これを一般的に書き直すと次のようになる。

(48) a (人ガ)〔事物〕ガ／ヲ〔始発〕カラ〔結果〕ニ V

b (人ガ)〔始発〕ガ／ヲ V

c (人ガ)〔結果〕ガ／ヲ V

d (人ガ)〔始発〕ガ／ヲ〔結果〕ニ V

d (人ガ)〔始発〕デ／カラ〔結果〕ガ／ヲ V

さて、先に結論を示すと、これを結果副詞と結果形容詞との交替（奥津（一九八三・一〇）では「形容詞（A）移動」）に関しては、原則として発生動詞文と生産動詞文とに可能であるといふ。

(49) a 太郎はたくましい軍人になった。

a \*太郎は軍人にたくましくなった。

b 強い平家もついに亡びた。

b \*平家も強くついに亡びた。

c ズボンに大きい穴があいた。

c ズボンに穴が大きくあいた。

d 香ばしいセンベイが焼けた。

d センベイが香ばしく焼けた。

以上の結果と(48)の構文とを比較してみると、第一に構文に「結果」を含み、第二にその「結果」がガ/ヲで実現されている場合にこの交替が可能であるということになる。これを奥津(一九八三・一〇)は次のように定式化している。

◎形容詞移動の条件: 「結果」の名詞句が主語または目的語であるとき、その名詞句の中の形容詞は移動できる

そして形容詞移動が可能である理由を次のように述べる。

「連体修飾成分とは、それが修飾する名詞の属性を表すものである。とすれば、「結果」の名詞を修飾する成分も、やはり「結果」を示すのが原則であろう。「中略」「結果」一般には状態を示す述語が副詞形として表層文に実現するのだから、「結果」を表す連体修飾成分も副詞形をとって変化動詞にかかっても不思議ではない。その上、「結果」の名詞句は主語または目的語として現れている。それは「事物」ではないけれども、一般変化動詞文で、「事物」が主語または目的

語となり、「結果」がそれに呼応する述語となるのに対応して、「結果」の名詞句が、あたかも「事物」のようになって、それを修飾する述語を分離し、副詞形としての「結果」を示すようになるのであろう。」

それに対して、それ以外の場合に形容詞移動ができないかの理由は「事物」(始発)が「結果」と共にA移動すれば、同じ副詞形にちがう意味が担わされることになり、それが「事物」であるのか(始発)であるのか「結果」であるのかの意味解釈に困難を生ずるから」であろう、という。

確かに、「結果」が存在しないことには、その「結果」の有様を描く結果副詞や結果形容詞が用いられる契機がないのであるから、「結果」を持たない消滅動詞にその交替もあつて得ないという論理はとりあえず承知できる。しかしながら、「結果」はあるが二格で実現される一般変化動詞にも交替ができない理由を「意味解釈の困難」に帰するのは、充分な説明とはなっていないように思われる。たとえば、奥津(一九八三・一〇)でも、(50)の例文を挙げ、「第一の「リップパニ」は、様態副詞で、「太郎リップパニシタ」という父の行為を「リップパニ」というのであり、第二の「リップパニ」は「太郎ガリップパニナル」という太郎の状態変化の「結果」を示すものである。」と説明している。

(50) 父は太郎をりっぱにりっぱにした。

この用例の許容度がどれくらい高いか、という問題は別に

して、この用例の二つの「りっぱに」のかかり先は特定できるのに、一般変化動詞文の場合に、「意味解釈の困難」というような語用論的説明によって、構文論的な非文の説明をしようとするのには無理があるのではないだろうか。

ここで、一般変化動詞ナル・スルの格構造は、着点格が空欄になっており、ここに義務的に着点項が埋められなければならないが、これには名詞十二も含めて、何らかの副詞形が用いられる。その点で、それ以外の多くの変化動詞が、すでに着点格には何らかの意味が充填されており、結果副詞は任意的に用いられ、その働きは着点の意味を詳細に叙述するに留まるものとは区別される。

(51) a 山田はくたくたになった。

’ a 山田は(くたくたに)疲れた。

b 積木の城がばらばらになった。

’ b 積木の城が(ばらばらに)壊れた。

c 山田はぼこぼこになった。

’ c 山田は(ぼこぼこに)殴られた。

ナル・スルの着点格は、義務的であるだけではなく、空欄は一つに限られているので、複数の項をとることはできない。これが、所謂形容詞移動ができない理由であると思われる。すなわち、(52) a のように形容詞形(連体)であれば、名詞と一体となって全体で一項と考えられるが、(52) b のように副詞形(連用)になると、着点項が複数と解釈されて不自然とな

る。もちろん、(52) c、d のように個々であれば問題ない。

(52) a 太郎は背がすらりと高い大学生になった。

b \*太郎は背がすらりと高く大学生になった。

c 太郎は大学生になった。

d 太郎は背がすらりと高くなった。

このように見てくると、結果形容詞が結果副詞に移動する「形容詞移動」というとらえかたは不適當であり、結果形容詞・結果副詞それぞれに用いられる事情が異なると考える方がよさそうである。

まず、結果形容詞であるが、結果形容詞によって修飾される名詞は、着点項すなわち変化によって新たに生ずる対象(結果対象)でなくてはならない。しばしば、日本語の「炊く」「沸かす」などの動詞は、変化前の対象(事前対象)、「米」「水」よりも、結果対象(「ご飯」「お湯」)の方を対象格としがちであることが指摘されるが、日本語のそれらの動詞は生成動詞に含まれると考えられ、特に奇異な現象ではない。さて、同じ動詞であっても、結果対象を修飾する形容詞は結果形容詞と解釈されるが、事前対象を修飾する形容詞は結果形容詞とは解釈されない。その点、結果副詞は動詞に含まれた結果の状態の詳細化をするのであるから、名詞には関わりなく用いられる。

(53) a おいしい／おいしくご飯を炊いた。

b #おいしい／おいしくお米を炊いた。

c #おいしい／おいしくジャカイモを煮た。  
d #美しい部屋を／部屋を美しく飾った。

とはいうものの、結果形容詞の振舞いが動詞と関わりがないわけではなく、修飾する名詞を結果対象としない動詞には結果形容詞を用いることはできない。(54) a、bでも「熱々のスープ」や「かちかちの水」を「作る」であれば問題ない。この場合も、結果副詞は用いることができる。

(54) a \*熱々のスープを／スープを熱々に温めた。

b \*かちかちの水が／水がかちかちに固まった。

以上のように、結果形容詞が用いられるのは、動詞との関わりも含めて、結果対象を修飾する場合に限られる、ということになる。

次に、結果副詞の特徴を見ていきたい。結果副詞は、結果形容詞が結果対象を修飾する場合にしか用いられなかったのと異なり、変化動詞に対して比較的広く用いることができる。しかしながら、結果副詞の用法に制約がないわけではない。

矢澤(一九九三・七)は、(55) a、bと(55) a'、bとの許

容度の違いを「結果予測性」の違いであると考え、「おびたたく」といった量や「細長く」といった形状ならばその動作・作用によってもたらされる結果の予想が可能であり、移動しても不自然ではない。「冷たく」とか「青く」といった温度や色はそれぞれの動作・作用と直接結びつけないく、結果の予想ができないため不自然になるのだと解釈できる。」

と論じる。

(55) a 水がおびただしく／おびたたく水が湧き出した。

' a ? 水が冷たく／冷たい水が湧き出した。

b 蔓が細長く／細長い蔓が伸びた。

' b ? 蔓が青く／青い蔓が伸びた。

しかしながら、これも変化の結果的状态を表わしているかどうかを問題にすべきなのではないだろうか。すなわち、「水が湧き出し」てはじめて水の量が「おびたたく」かどうかかわかり、「蔓が伸び」てはじめて「細長い」かどうかかわかるが、「水」は「湧き出す」前から「冷たい」であり、「蔓」は「伸びる」までもなく本性として「青い」のである。ここで、結果的状态を表わしている(55) a 「おびたたく」、b 「細長く」は結果副詞と了解されるが、結果的状态を表わしていない(55) ' a 「冷たく」、' b 「青く」は文中での働きを与えることができないために不自然となるのであると考えられる。「結果予測」について議論するなら、「水がおびたたく湧く」かどうか、「蔓が細長く伸びる」かどうかの方が、結果を見なければわからないので、「結果予測性」が低いと論じることができたはずである。

以上は、まさに結果副詞であるかどうかの問題であったが、実はそれ以上に問題になるのは、「(意志性)」との関わりである。(56) a・bでは非意図的な、失敗としての結果的状态を表わしているために、特に形容詞型が不自然になるのであると

解釈できる。すなわち、統語的には、意図的行為「焼く」「茹でる」の対象として一体となった「形容詞+名詞」が全体として作ることを意図された対象と解釈することが要請される。しかし、実際には「真つ黒のパン」「やわやわの Pasta」を作ることが意図されたのではなく、誤って「パンを真つ黒に焼き」「Pastaをやわやわに茹で」てしまったのであるから、形容詞形は不自然となると考えられる。

(56) a 花子は？真つ黒に／\*真つ黒のパンを焼いてしまった。  
b 雪子は？やわやわに／\*やわやわの Pasta を茹でてしまった。

しかるに、矢澤（一九九三・七）では一見まったく逆の議論を展開している。たとえば、(57) a、b の差について、「フライ」なら「大きく」や「高く」意図して打つことも可能だが、「ホームラン」が「大き」いかどうかは「打つ」ときにあまり意図されず、結果がたまたま「大き」かったにすぎない」と説明する。ただし、矢澤（一九九三・七）はこの問題を「制御可能性」の問題であると呼んでいるが、ここで議論している〈意図性〉と共通する問題意識であることは明らかである。こちらでは、単に「フライを打つ」だけでなく、わざと「大きく」打つというように、意図的な行為の場合に副詞形が用いられると論じているわけである。

(57) a? ホームランを大きく／大きなホームランを打った。

b フライを大きく／大きなフライを打った。

以上のように、結果副詞・結果形容詞のいずれが、意図された目標であるのか、意図されない結果であるのか、場合により、条件により、判断に違いが生じてくるようである。ただ、その違いも微妙であり、どのような条件の違いが作用しているか、必ずしも明確に解明されているとはいえない。

また、奥津（一九八三・一〇）では、消滅動詞には結果副詞が用いられないと論じているが、変化の結果としての（非在）のありさまを表わす「跡形もなく」「一人残らず」「きれいさっぱり」などのような副詞句は、消滅動詞と共に結果副詞と考えるもよからう。

(58) a 砂漠の都市は跡形もなく消え去った。

b 平家一門は壇ノ浦で一人残らず滅亡した。

以上のように、結果副詞および結果形容詞に関しては、いまだ完全に解明されたと言うことはできない。ただ、副詞・形容詞と対象との時間的な変容の有様によって表される意味の関わりに関しては、かつて井島（一九九〇・三）で触れたことがある。

おわりに

本稿では、変化動詞について格構造を中心とした諸問題について議論したに留まり、変化動詞にはさらに論じるべき問



題が多く残されている。また、言語学の諸理論には、変化動詞の分析を得意とするものが少なくなく、特に語彙概念構造論では、まさに理論の中心に変化動詞の構造が組み込まれている。しかしながら、本稿では、筆者の拡大格文法の理論による分析を提示することを主眼としたために、他の諸理論との比較検討には意を用いなかった。これらのことは、また機会を改めて論じたい。

### 参考文献

- Charles J. Fillmore (一九七〇) "Types of lexical information" Ference Kiefer ed. "Studies in Syntax and Semantics" D. Reidel (〇・ノールモア (一九七五・八) 所収)
- Charles J. Fillmore (一九七二) "Some problem for case grammar" Richard O'Brien ed. "Monograph Series on Language and Linguistics" 24, Georgetown University Press (〇・ノールモア (一九七五) 所収)
- John M. Anderson (一九七二) "The Grammar of Case — towards a Localistic Theory" Cambridge University Press
- チャールズ・J・フィルモア (一九七五・八) 田中春美・船城道雄 訳 『格文法の原理—言語の意味と構造—』三省堂
- Jeffrey S. Gruber (一九七六) "Lexical Structure in Syntax and Semantics" North-Holland Publishing Company
- 影山 太郎 (一九八〇・二) 『日英比較語彙の構造』松柏社
- Donald Davidson, (一九八〇) "Essays on Action and Events", Oxford University Press (服部裕幸・柴田正良 訳 (一九九〇・三) 『行為と出来事』勁草書房)
- Charles J. Fillmore (一九六九) "Toward a modern theory of case" David A. Reidel and Sanford A. Schane eds. "Modern Studies in English" Prentice-Hall (〇・ノールモア (一九七五・八) 所収)
- 池上 嘉彦 (一九八一・七) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化の対ポロジ—』大修館書店
- Charles J. Fillmore (一九七〇) "The grammar of hitting and breaking" Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum eds. "Readings in English Transformational Grammar" Ginn and Company (〇・ノールモア (一九七五・八) 所収)
- 奥津敬一郎 (一九八一・二二) 『移動変化動詞文—いづゆる spray paint hyppalage—』『国語学』第百二十七集 (『拾遺 日本文法論』 (一九九六・一〇) ひつじ書房)
- 石井 正彦 (一九八三・三二) 『現代語複合動詞の語構造分析—《動作》

・《変化》の観点から—『国語学研究』第二十三号（東北大学）

部研究報告』第四十一号

石井 正彦（一九八三・八）「現代語複合動詞の語構造分析における

一観点」『日本語学』第二卷第八号

仁田 義雄（一九八三・一〇a）「結果の副詞とその周辺—語彙論的

統語論の姿勢から—」渡辺実 編（一九八三・一〇）所収

奥津敬一郎（一九八三・一〇）「変化動詞文における形容詞移動」渡

辺実 編（一九八三・一〇）所収

渡辺 実 編（一九八三・一〇）『副用語の研究』明治書院

仁田 義雄（一九八三・一〇b）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」

『日本語学』第二卷第十号

Ray Jackendoff（一九八三）"Semantics and Cognition" The MIT Press

石井 正彦（一九八四・一一）「複合動詞の成立—V+Vタイプ of the 複

合名詞との比較—」『日本語学』第三卷第十一号

井島 正博（一九八六・三）「格文法の再構成」『防衛大学校紀要』第

五十二輯

Ronald W. Langacker（一九八七・九）"Foundations of Cognitive

Grammar vol. I・II" Stanford University Press

井島 正博（一九八八・三）「動詞の自他と使役との意味分析」『防衛

大学校紀要』第五十六輯

井島 正博（一九八八・一二）「受身文の多層的分析」『防衛大学校紀

要』第五十七輯

井島 正博（一九九〇・三）「数量詞の多層的分析」『山梨大学教育学

Ray Jackendoff（一九九〇）"Semantic Structure" The MIT Press

井島 正博（一九九一・八）「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日

本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

堀川 智也（一九九三・七）「二格名詞の結果を表す『結果の副詞』

について」『日本語教育』第八十号

矢澤 真人（一九九三・七）「いわゆる『形容詞移動』について」小

松英雄博士退官記念 日本語学論集』三省堂

影山 太郎（一九九三・一〇）『文法と語形成』ひつじ書房

中北美千子（一九九五・二）「結果の副詞について—様態の副詞・程

度表現との相関—」『国文目白』第三十四号（日本女子大

学）

Adel E. Goldberg（一九九五）"Constructions: A Construction Grammar

Approach to Argument Structure" the University of Chicago

Press（川上馨作 他訳（二〇〇一・四）『構文文法論 英

語構文への認知的アプローチ』研究社）

Behn Levin and Malka Rappaport Hovov（一九九五）"Unaccusativity—At

the Syntax-Lexical Semantics Interface" The MIT Press

影山 太郎（一九九六・一〇）『動詞意味論』くろしお出版

奥津敬一郎（一九九六・一〇・一一、一二、九七・一一、一二）「連体即

連用？—変化動詞文その一—その五—」『日本語学』第十

五卷第十一、十二、十三号、第十六卷一、二号

井島 正博（一九九七・三）「授受動詞文の多層的分析」『成蹊大学文

学部紀要』第三十二号

柏端 達也(一九九七・六)『行為と出来事存在論—デイヴィドソ

ンの視点から—』勁草書房

丸田 忠雄(一九九八・一一)『使役動詞のアナトミー—語彙的使役

動詞の語彙概念構造—』松柏社

影山 太郎 編(二〇〇一・三)『日英対照 動詞の意味と構文』く

ろしお出版

高見 健一・久野 瞳(二〇〇二・一)『日英語の自動詞構文』研究

社

(いじま まさひろ 人文社会系研究科 助教授)